

青梅市文化財ニュース

第250号

平成20年8月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

和田乃神社例大祭の奉納相撲

9月7日、日向和田にある和田乃神社の例大祭が行われます。例祭日は9月1日ですが、現在は9月第1日曜日に実施されています。

和田乃神社は創立年代は不詳。祭神は^{おおやまつみのかみ}大山祇神、^{いわながひめのかみ}磐長比売神、^{かやぬひめのかみ}茅野比売神です。旧称和田村の総鎮守で和田明神と称していました。慶長3年(1598)和田村を日向和田村と日影和田村に分村したのに伴い、三島明神と改称しました。その後、明治維新の際に社号を復古し、明神を神社に改め和田乃神社と公称しました。

例大祭に行われる奉納相撲は、起源は定かではありませんが、和田村時代に多摩川を挟んで勢力争いが起こったとき、その解決に和田村総鎮守である和田明神の神慮を仰ぐため、相撲を奉納してその勝敗により決めたものと伝えられています。発祥は寛文年間(1661～1672)といわれています。

寛政5年(1793)再建された本殿には相撲の彫刻があります。当時は江戸をはじめ全国に相撲が盛んで、和田乃神社の奉納相撲も賑わったものと思われます。天保15年(1844)に奉納された相撲の額を見ても、その盛大さがよく分かります。

明治維新後は各地に草相撲力士が輩出して興行相撲が催されるようになり、和田乃神社も明治中期から昭和にかけては、八幡講という力士たちによって奉納されています。講元は四股名「玉の川」が仕切り、昭和になってからは奥多摩町梅沢の四股名「誠石」になり、戦後は地元の青年団に受け継がれました。現在は子供会が受け継ぎ、夏休みから稽古に励んだ小学生が例大祭の日に奉納しています。

奉納相撲は学年ごとに行われ、一番勝負の「お手合わせ」、「三人抜き」、中入りをはさんで、「五人抜き」、「一番勝負」、「三役揃い踏み・三役相撲」と続きます。中入り前には、「力むすびしこ入り」という行事が行われます。「力むすび」とは塩を使わずに作った1個5勺のおにぎり（現在は小さめになっています。）で、この握り飯を作る役割を「お天間」といって男達だけが携わります。今は「日より会」（日向和田の山車のカジ切りの団体）が担当

しています。「力むすび」は切溜に入れ本殿に奉納した後、中入りに神前から撒し、三役力士（元は東西の大関力士）が切溜を肩にして土俵上で四股を踏み、参詣者に授与します。この「力むすび」を頂戴することにより、健康長寿、厄除のご守護があると伝えられています。

相撲の終わりには「八幡幣」という行事が行われます。氏子の中から男児（0～1歳）を選び、また、長さ2尺5寸の節が5つの真竹を用いて八幡幣を作り、力士が八幡幣と男児を抱いて土俵上で胴上げをし、八幡幣を授与します。本源は九州の宇佐八幡宮といわれていて、子供の健やかな成長を祈願するものです。八幡幣を作る人は宮司ではなく、相撲の世話人に代々受け継がれています。

和田乃神社の絵馬は、力士が相撲をとっている姿が描かれている相撲絵馬です。絵馬は、もともと神の乗り物と考えられていた馬を献上する風習から生まれたもので、代わりに馬の絵を板に描いて奉納したのが始まりです。後に馬以外の絵も描かれるようになり、相撲の絵が描かれた絵馬も各地に現存しています。和田乃神社の絵馬はその一つです。参詣者はこの絵馬を戴いて家に持ち帰り、神棚あるいは門口などに掲げて一年間御守護を願い、翌年の例大祭にお礼参りをして絵馬を納め、新しい絵馬を戴いて持ち帰るのが昔からの慣わしでした。

（文責 久保田 繁男）

参考文献：パンフレット「和田乃神社」